

# 徳永直文学碑建立にご協力を!

徳永直研究会編 徳永直文学碑をつくる会発行

## 徳永直 短篇選集 文庫本型 五〇〇円

収録 最初の記憶・他人の中・あまり者  
作品 黒い輪・彼岸・冬枯れ・八年制

### ● 広津和郎

私は徳永直を現代の日本文壇で最も小説のうまい作家の一人だと思っていた。誇張がなく、ツケ焼刃がなく、一番身についた平易な文章によって的確に事象を描いて行く技術と訓練とは、見上げたものである。所謂芸術派といわれる人々の間にもこのくらい身についた技巧をもって、些かの危げなく小説を書いて行ける作家は幾人もあるまい。

徳永直

## 太陽のない街 新日本文庫 三三〇円

大正15年の正月をむかえた東京小石川の印刷労働者長屋は、作業日数大幅ダウンを告げる会社側の発表におとそ気分もふきとばされた。せまりくる昭和恐慌と中国侵略の前に、ここに労働者と資本家とが死力をふりしぼってたたかう共同印刷の大争議の幕が切って落とされた。その渦中であつた著者が描く名作。

徳永直文学碑

すまきに寄せ

(二)



- |       |       |
|-------|-------|
| 松田 解子 | 林田 茂雄 |
| 山本 秋  | 寺崎 房枝 |
| 大沢 幹夫 | 祖父江昭二 |
| 山田清三郎 | 島田 馨也 |
| 規工川佑輔 | 千葉 昌秋 |
| 小沢 清  | 江口 渙  |
| 窪田 精  | 広津 和郎 |

徳永直文学碑をつくる会

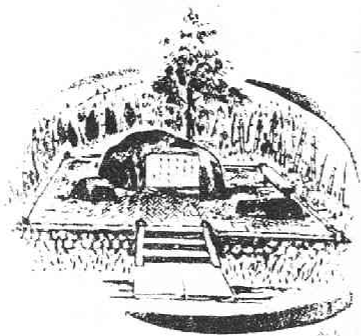
# 碑文

撰文 蔵原 惟人氏

私たちはもつと労働について語らなければならぬ。労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、乃至は消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである。

「最初の記憶」

(一九三八、八)より



見取図

画家 宮崎 静夫氏

## 要項

- 一、 建立場所 熊本市立田山登山口
  - 一、 完成予定 一九七七年一月
  - 一、 募金総額 五百万円
  - 一、 応募額 一口、千円とします。
- 職場、サークル、民主団体、会合等の大衆募金はこの限りではありません。

一、 送り先

題字 熊本日々新聞社長 島田四郎氏

## 忘れ得ない言葉

松田 解子

徳永さんといえば、まっさきに、あの笑顔と、しずかな、やわらかい音調の話し声がよみがえってくる。それは、たいていの場合、しずかで、やわらかい音調ではあったが、あくまでも、これだけは主張しておかなければ、というよりなときは、当然ながら声も張った。

戦前はプロレタリア作家同盟の例会などで、戦中はノウカ社から出された「文学評論」を介しての小さな集りの席で、そして戦後は主として徳永家でもたれた「勤労者文学」の編集委員会や、研究会などで、わたしはそういう徳永さんに接し、また同じ方向にむかって文学精進をつづける一後輩として、直接自作についての批判を頂きにうかがった場で、そういう徳永さんにふれた。

それら割合に数多い機会の中で徳永さんがいわれた次の二つの言葉が、わたしには今も忘れがたいが、そのひとつは、「……わたしなども、作品世界に自分がすっかりと没入して書けるなどということは、めったにない」と、いわれたことであり、もうひとつは、「ひとりの作家が生涯かかって、果たして何人の生ける人間像が書けるか……ということになると、思い半ばにすぎるといえないのではないうか、……」と、どちらも慨嘆の趣きをもっていわれたことだった。それを聞くわたしはといえば、文学に何年何十年恋々としつつもまだ一人の人間像も彫りあげられないありさまであったので、なおさら徳永さんのその言葉は忘れがたく心にのこった。

いま、徳永さんの文学碑が建つという。このときに当ってわたしは徳永さんの文学生涯における管々たる努力の爲、運動上でも創作上でも文字通りの、背を惜しまなかつた姿にこそ学びたい思っている。(作家)

## 消費組合と徳永直

山本 秋

徳永直の文学は、労働から離れては存在し得なかつたし、労働運動の体験と結びつくことなくしては存在価値を獲得できなかっただろう。その労働運動との不可分の要素として彼の生活と実践と意識とに終始からみ合っていたのが消費組合であつたという事実は、とかく見落されがちのように思うが、この事実を無視しては彼と彼の文学との真隨に迫ることは不可能ではあるまいか、

「太陽のない街」のクライマックスの一場面に関東消費組合連盟の兵糧応援隊が出てくるが彼は労働組合の幹部であるとともに博文館共働社の幹部として活動していたのである。スト敗北後、作中人物、萩原が放火事件を引きおこし博文館共働社が崩壊の危機に追いつまれた事後取締に苦悩する現実の徳永を馳け出した私はいはば関連本部で見ていた。

それから間もなく、当時の消費組合運動者の同人雑誌「協同組合運動」誌に徳永の作品が現われた。彼はこの雑誌の同人に名を連ね、且つこの雑誌の印刷を引受けた生産組合共働印刷所は、首になつた徳永などが起こしたものであつた。彼はこれで生活を立てようとしたのであり、「小資本家」という作品はその体験を訴いたものでは

ないかと想像される。

実は、「協同組合運動」誌に書かれた小説について、私は、スト敗北後の一労働者徳永直がなぐさみ半分にものしたざれどと思ひ無視していた。

二、三年後、戦旗で徳永直「太陽のない街」が評判になり、やがてハリコフ会議で国際的評価を受けるに及んで私はそのデビュー振りに驚いた。その後の彼と私とのかかわりについても語るべきことはあるが、割愛する。

それから何十年、つい二、三年前、私は集めはじめた戦前の消費組合資料中から「協同組合運動」誌を見出し、曾て見過ごしていた作品が「何処へ行く?」というのであり、作者の名が徳永直ではなくて徳永光であることを知つた。しかしこゝでも消費組合が出てくるし、作品の内容、この雑誌と徳永との関係などから推して「光」が「直」であることは九九%確実と断定する。私は津田孝氏にも意見を求めたが、氏も徳永に「光」時代があつたことを知らなかつた。これは新しい発見であつた。

この作品は数回連載であるが、第一回と第六回以降が欠けている。とりあえずコピーしてお送りし、地元の研究に委ねたい。

徳永は、その後、「輻重隊上前へ」「火は飛ぶ」など直接消費組合の斗争をテーマとした小説数篇を書き、消費組合に関する小さな文章も可成り残している。

徳永は、このように消費組合について書きつづけたが、彼自身によつて描かれた消費生活は、彼が批判したよりのな絢爛たるものではなく、貧困に喘ぐ労働者のそれだつた。(生協運動久友会副会長)

## 断片

大沢幹夫

戦後まもなく、一般には食糧事情のまだ悪かった頃、戦争未亡人のことを扱った映画を作ろうというのが東京のプロデューサーや脚本家、監督などが、「あぶら照り」を書いた徳永さんに話を聞く集りを持ったことがある。ふた間ぶつ通しの畳敷の大広間いっほいにすきやき鍋の食卓をいくつも並べた大人数だった。上座にすわらされた徳永さんは杯を程ほどに収めて飯を所望したが、よそわれた飯碗を受取るなり、「ほり、銀メシですか、」と眼をぼそめ、一箸そつと口に入れてから、「おいしいですね」としんから嬉しそうに相好をくずした。そのまったく作り飾りのない感嘆ぶりが実に徳永さんらしく私には思われた。

近い地域に住む同じ新日本文学会の会員だということから、ある時期ちいさなサークルを作つて文学勉強をしたことがあり、私はいろいろ教えられることが多かった。しかし同じ熊本であることを知つていながら熊本のことを話題にしたことはまるでなかった。むしろそんな同郷意識を避けるような気持のはたらきがお互いにあつたような気がする。たつた一度だけ、こんなことがあつた。

それは、党本部へ行く途中で道づれになつた二人の足が、通過する貨物列車に遮られて停止した踏切の前でだった。「熊本へ帰ることがありますか、」徳永さんがきいた。「ご両親は……」

「二人とも戦時中に死にました。しかし親せきとそれに友人達がいるので九州へ行く時には寄りますがね」そして私は中学時代の同級生である、隈庄の緒方求也の話をして、熊本へ帰る折があつたら、ぜひ訪ねて下さい。

「美少年」を心ゆくまで飲めますよと勧めた。

「美少年」か。行きたいですねえ……」徳永さんは眼をぼそめて呟いた。それはちょうどあの「銀メシ」を口にふくんだ時の感嘆の表情そのままだつた。

(劇作家・熊本出身)

## 思いおこす徳永直との初対面

山田清三郎

わたしが徳永直とはじめてあつたのは、一九二九年(昭和四年)の春だつたとおもひ。当時わたしの住んでいた淀橋区(現新宿区)上落合の自宅に、林房雄の紹介で、風呂敷につんだ「太陽のなない街」の分厚な原稿をたずさえて、訪ねてきたのである。徳永が林房雄と知りあつたのは、徳永が熊本で、印刷工をやつてるとき、熊本の第五高等学校在学中の後藤寿夫(のちのペンネーム林房雄)から、社会科学の手引をうけていろいろのものだつた。

「太陽のなない街」は、知られるように、徳永自身が争議団幹部の一人としてたつた共同印刷の斗争議に取材したのだが、この争議にはわたしなども、日本プロレタリア文芸連盟の一員として応援活動をおこなつたこともあつて、この作品にはつよくひきつけられた。

そして、わたしが発行兼編集責任者だつた『戦旗』の同年六月号から十一月号まで、六回にわたつて分割連載したが、これが無名の労働者作家徳永直を、一躍世におくりだすと共に『戦旗』そのものの誌価をも、いちじく高くすることにまつたのである。

そのときから半世紀近い四十七年がすぎたわけだが、わたしは、その初対面のとときの和服姿の徳永の腰の低い、いんぎん丁重な態度をいままなおありありと眼によみがえらすことができる。

その徳永直の文学碑が、出身地に建立されることになつたのである。月並なことばだが、感無量なるものがある。  
(作家)

## 茂吉の診察を受けた直

規工川 佑 輔

聡しいことであるが、私は徳永直の作品をあまり読んでいない。従つて、直の人と文学についても人並みの事しか知らない。ただ、ここに、直の年譜に書き入れるべき重要事項として取りあげてもよさそうな資料を一つ公開したい。

アララギの総帥齊藤茂吉とプロレタリア作家が奇しくも因縁を持つた事実を私は発見した。

このことについては、今後じっくりと究明していきたい。昭和十年十月二十三日の茂吉の日記に「午前中、夜歌ノ清書ヲナシ、一寸、人麿短歌ノタメニ用語例ヲサガス。午後本院ニ行キテ総廻診ヲナス。氏家信君トアフ、(川本氏ノ件、デブソマニ)、矢代君ノ紹介デ徳永直氏ヲ診察シ。モ一一人外来ノ夫人ヲ診察シ。(以下略) (旧版齊藤茂吉全集四八巻) とある。これにより神経医学者茂吉に直がはじめて診察してもらつた事実が判然とする。この時茂吉五十四歳、直は三十六歳であつた。矢代君とは、矢代東村のことでは彼は歌人で「短歌評論」の有力メンバーであつた。

プロレタリア歌人であつたので、直とも親交があつたのであろう。その歌人の紹介で、直は人歌人茂吉の診察を受けるという奇縁を持つたわけである。茂吉は芥川竜之介をはじめとして、文学者の診察を折折受け合つている。この頃の直の精神状態にはいささかの異常があつたのであろう。直の弱さの一面は久保田義夫氏も指摘している。(本誌(一) 翌、昭和十一年一月二十九日、直は再び茂吉の診察を受けるため松原本院を尋ねている。日記によれば「……、徳永直。ヲ診察シ(以下略)」(○は筆者付す)と記述されている。前回は徳永。と記しているのにこのたびは徳永直。と書いているのは約三か月の間に茂吉が直に親しみ感じていることを裏書きするものではなからうか。

この日診察を終えた茂吉は、神田銀映座で『白き王者』を三筋見、鱈を食つて帰宅している。二人の文学者がこの日対面したのであるが、それぞれの生き方は將に対照的である。二・二六事件の約一月前のことであつた。

なお、これは余談であるが、昭和九年に茂吉は人麿研究「鴨山考」を執筆するかたわらマルクス全集を原語で読み続けている。  
(アララギ会員・玉名教育事務所指導主事)

## 直 門 メ モ

小 沢 清

古くさい言葉でいえば、わたしは徳永直のただ一人の直門である。昭和十五年の夏から昭和三十二年の春ごろまでだつたと思う。このとき徳永さんがあまりよく思つていなかった熱田五郎を連れていった。その翌年か、記

憶はハッキリしないが、訪問したらガランとした家に奥さんがいて、「病で入院して面会謝絶ですから」ということで、どこの病院とも教えてくれなかった。

しかし、徳永さんの代表作の一つ『妻よねむれ』にでてくる、なくなった奥さんだつたら会わしてくれたと思う。この『妻よねむれ』という本の表紙文字は宮本百合子が書いたもので、全体が黒い色彩である。その四十三ページには、つぎのような文章がでてくる。

十九年三月の五日か六日だつた。隣組の人や、友人のN、O君などに手伝ってもらつて、幸一とおれが前棒をかつぎ、戸板にのせたお前を、近所の日外科病院に搬んでいった。――

とでている。この「N、」は中野重治であり、「O君」はわたしである。あと棒を二人でかついだものと思う。この文章は消すことはできない。また、ただ一人の直門とわたしは書いたが、その当時は『はたらく一家』『結婚記』など映画にまでなつていたくらいだから、労働者の文学青年は、たくさん徳永さんのところへきたわけだ。けれども、これは徳永さんのほうで気にいらず断つたり、自分から文学から遠ざかつたからで、ついに、わたし一人になつたわけだつた、労働者はずっと粗野だから、小説を書きつづけてゆくのは厳しい。一九五一年ごろわたしは徳永さんと、まだ汚ならしかつた新宿駅のガード下で別れたが、徳永さんがもどつてきて、わたしの肩を叩き「小沢君、死ぬなよ」とやさしくいつてくれたことがある。その厳しさは現在もそりである。

いまわたしは「民主文学」という雑誌に所属して、文学サークル委員を一年やつたし、ゼミナールの小説部門を担当しているが、その雑誌向きとして労働者の作が多いが、そのほとんど短篇として成功していない。

だから、短篇の名手である―これは『はたらく一家』の広津和郎の序文を読むとよくわかるが、徳永さんの作品集をなぜ出版する本屋さんがいないのか、複雑で不思議な気もちさえしてくる。それから、徳永さんが他の文

学者にたいして、わたしにこぼした話が、二つほどあるが、本人も書かなかつたし、わたしも、よつほどでなければ書きたくない。とにかく、徳永直論のようなものがでて、まちがつた文章を書く人がいればそのあやまりを正すために朱線を引くことくらいはわたしにできると考えている。最後に『一つの歴史』の年譜にでていない『文学ノート』という一九五〇年に書いたおもしろい本をもつているし、あることをつけたりとして書いておくことにする。

(作家)

## 徳永 直文学碑のこと

窪田 精

徳永さんの生前、私は一度だけ世田谷のその家におじゃましましたことがある。たしか一九五〇年の四月ごろのことである。小沢清君など、そのころ勤労者作家などといわれていた何人かの若い仲間たちといつしよであつた。

しかし、「太陽のない街」のプロレタリア作家としての徳永さんのことは、そのずつと前、戦争中から知つていた。戦後になつてから、そのころ私も参加していた新日本文学会の大会などで徳永さんが発言するのを、何度かみたこともある。徳永さんは戦前から戦後へかけて、たくさんのすぐれた作品を書いている。私たちはそれらの作品から多くのものを学んできた。

徳永さんは戦後の一時期の民主主義文学運動の「混迷」もよりやくおさまり、これからというときに亡くなつ

た。私はそれを残念に思っている。すでに小林多喜二の文学碑があり、昨年、宮本百合子のそれが郡山にできたとき、徳永さんのことがふつと、私の脳裡をかすめた。徳永さんの全集がまだ刊行されていないのも、気にかかっている。こんど熊本に文学碑が建つという話を聞いて、ほっとしている。よかつたと思う。

この企てに多くの方が協力してくださるようお願いしたい。とくに私もその一員である、日本民主主義文学同盟に参加されている方々が積極的に協力してくださるよう訴えたい。

(作家・日本民主主義文学同盟副議長)

## 「太陽のない街」に感動

林 田 茂 雄

私が文学的に行きつまつて自殺のことばかり考えていたころ、ちやうど芥川竜之介が自殺して間もないころ、友人から雑誌「戦旗」をすすめられてよんだのが、私の人生の大転換のきつかけだった。

そこから今度は「殺されても死なない」という男に私は生れ変わったのだ。それはじめてみた「戦旗」に徳永直の「太陽のない街」の第一回目が、小林多喜二の「蟹工船」とともに出ていたのである。ながい間文学のために苦勞してきていたつもりが、ここに全く新しいタイプの文学にぶつかつて全心的にゆすぶりをかけられたときのあの新鮮で強烈な感動が私のそれからの人生をきめたのだから、徳永直はいわば私の命の恩人の一部であるともいえる。

(評論家・熊本出身)

## 文学碑用地提供にあたって

寺 崎 房 枝

こんな事を申しますと、一寸変にとられるかも知れませんが、徳永直については私は何も知らないのです。発起人の方々が私方にこられました初めに名前を知つた具合でした。そして皆様の徳永直文学碑をつくられる切々たる心情にうたれました。

たまたま碑をつくる予定地の竜田山は、隣りにガラシヤ夫人武蔵塚で有名な泰勝寺があり竹林にかこまれた物静かな風光明媚な地であります。熊本出身の文学者でいろんな意味での徳永直、熊本の文学史を掘り起す意味でよろこんで土地を提供する事に賛成しました。

ただ、私同様徳永直の名を知らない人も多々あるかと思えます。プロレタリア文学者としての碑ではなく広く親しまれる碑をつくつて欲しい、そのためには周囲のふんいきなり、碑の設計なり、碑文なりに多大の配慮をして欲しいとお願ひしました。

皆様どうか土地提供について私のこの心情を汲み取られまして、一般大衆から親しまれる碑、広く大衆から愛される徳永直の碑をつくつて欲しいと念願する次第であります。

(ライオンビル社長)

## 全集か、せめて選集を

祖父 江 昭 二

一九二〇年代から三〇年代の後半にかけてくりひろげられてきたプロレタリア文学運動をぬきにしては、現代日本の文学とその歴史は語れない。徳永直は、そういう重みを持つ日本のプロレタリア文学運動を代表する文学者たちのひとりである。

よく知られているように、無名の徳永は、みずからその指導的な幹部のひとりとして体験した、あの共同印刷の斗争譚を文学的に凝縮した長編小説『太陽のない街』をひっさげて、プロレタリア文学運動の世界に登場したのであった。それは、当時、プロレタリア文学・芸術運動のもつとも中軸的な団体であったナップの機関誌『戦旗』に連載され、完結を待たずして単行本として発売され、ほとんど同時に劇化もされて、左翼劇場によるその公演は、平常、新劇などを見ぬ多くの労働者が観劇して超満員となった。作品『太陽のない街』が、みずからが持つ力によってひとつの旋風をまきおこしたことが理解されよう。

つまり、『太陽のない街』はプロレタリア文学運動の力を、実作の上でも明したてた、もつともあざやかな見本のひとつである。しかし徳永の登場の意味はそれだけではない。日本資本主義の展開とともに生み出された労働者たちは、誕生以来、長い間、「植民地以下的」と言われるような生活水準をおしつけられ、人間として扱われてこなかったのであった。小説の主人公として登場することもほとんどなく、ましてや文学作品を創る力を持

ち得る人間などとは思われず、言わば、すぐれた人類の文化の世界からしめ出されてきたのであった。

しかしプロレタリア文学運動はこの抑圧され、黙殺された人びとへの働きかけを自覚的に追求し、さらにこれらの人びとの中から新しい文学者が生まれ、成長することにつとめたのであり、そこにプロレタリア文学運動の日本文学史に寄与した特徴的な積極面のひとつがあったと思うものであるが、まさに徳永直こそは、そういう追求・努力に応じた労働者であり、その代表的な見本であった。そこに作家徳永の生涯のいまひとつの大きな意味があるだろう。むしろ徳永は、ただ『太陽のない街』の提出だけで終った作家ではない。こういう労働者の集団的な戦いを描いたスケールの大きい作品系列―戦後で言えば、『静かなる山々』につながるような作品系列のほか、初期の作品『馬』（改作『最初の記憶』）に始まり、たとえば戦後の作品『妻よねむれ』にたどりつくような、数多くの佳作がある。

それにもかかわらず、こういう作家徳永直の全集はおろか、代表作を集めた選集でさえも、いまなお刊行されないまま、今日に至っている。だから、こんなふうに不当に冷遇されている、とぼくには思われる徳永直の文学碑が建てられることを、ぼくはかげながら喜び、そんな立場にいる人間ではないが、どうしてか、よくやって下さったという気持ちを抱いている。

と同時に、文学碑の建立で終らず、これを機会に、徳永の全集か、せめて数善本の選集が刊行され、徳永直の文学の意味がもっと広く追求され、明らかにされていくことを心から願いたい。

それこそが、徳永に対する真の顕彰ということになるだろう。

(和光大学教授)



## 徳永 直文学碑の建立

島田 磐也

郷土の先輩として、今は亡き作家徳永直氏を表彰するのは、私たち一苟しくも文筆の徒を以て任ずる後輩の礼であろう。私も若い頃の苦勞時代に、「太陽のない街」を愛読した一人である。

来春を期して、立田山登山口八室園から入った地点であろうか、徳永直文学碑が建立されると謂う。私も応えて寸志を寄せ、諸彦に従い同慶を共にさせて頂くことにした。思想云々は別として、日本文学は永遠不滅の光である。徳永氏の遺芳は風雪を越えて今日も燦と輝やいている。

とまれ、郷土が生んだ傑れた芸術家を頌え、徳永文学留魂碑の建立を欣ぶ所以である。(詩人・熊本出身)

### 「作家魂」つらぬいた徳永 直

千葉 昌 敏

近ごろ、徳永直の一九三〇年代の短篇小説につづいて戦後の作品「背のたかい娘」、「村にきた文工隊」、そして「静かなる山々」などを読んだ。「太陽のない街」も改めて読み返した。すると、旧制中学の三年ごろ、多

喜二の作品と前後して読んだ「あまり者」、「馬」の感動が、私の胸に甦つてきた。太平洋戦争のさなかで、当時の私たちが学徒動員で工場や農村に駆り立てられ始めたころだった。

徳永直の初期の短篇は、彼の作品の中でまばゆい光りを放っている。とくに「他人の中」や「最初の記憶」には、彼が幼い年ですでに背負わされた生活のための労働の辛さ、そして喜びが細かな筆はこびで書き込まれている。

家族じゅうで造った竹箸を、母と朝市に売りに行く、情景を描いた「最初の記憶」。買出人の手垢や埃りや汚れる商品を繕いながら一心に売り立てる親子。商いが終つて「ぬしも腹が減ったばいな。ウン、も一つ喰えーや」と、そば饅頭を握らせてくれる母親の描写は、壺井栄の短篇「裁縫箱」を読んでの感動に劣らず美しい。この作品にその後、改めて書かれた「馬」の原型がある。

「他人の中」は、米屋の小僧になつた「私」が店の者にこき使われながら勉学への情熱をつのらせ、また思春期の繊細な感情で同僚のツルをいたわる。親の借金のかたに身売りされるツルへの同情が、實しく慮げられた者の怒りとして噴き上がる。しかし、ルナアルの「にんじん」のニュアンスを感じさせるような手法でカラッと書いてあるところが、暖かい共感を呼ぶのである。

徳永直は、彼の二つ二つの作品を、心をこめて書き上げている。彼は「太陽のない街」(岩波文庫版)に自身で書いた解説をつけ、次のように記している。

「これを書いたときの私は非常にねっしんで、感動的であつた。三ヶ月ばかりで書いた記憶であるが、最後の一月は 工場に病氣届を出して、友人Nの借間にかよつて書いた。かいていて感情が激してきて、原稿紙が涙にぬれてこまり、便所の手洗水で顔を洗つては、また坐りなおしたりすることがしばしばだつた」。また彼は短篇集「八年制」(新潮社版・一九三九年発行)のまえがきで、五十年も百年も腐らない作品を書く

のは大変だ、自分に正直になることはなおさら困難なことだと述べて、次のように書いている。

「正直というものが、固定して存在しないのだから。激しい波のなかを泳ぎながらでは、卑屈にもなろうし、傲慢にもなろう。斜めになつたり、仰向けになつたりしてゐる姿勢を、確実にキャッチすることは、それが自分自身だけに困難である。」

一八〇〇年の末から一九〇〇年の半ば過ぎの戦争と抑圧の時代を挟んでの激動期を生き抜いた、徳永直の作家としての生涯はさまざまな起伏に満ちていた。しかも、生活の困難さが、絶えず彼につきままとつた。だが、彼はいつも自身をいつわらなかつた。息切れや足踏みさえ、彼はありのままの自分を作品にした。

徳永直の小説からは、彼の体臭や、肌の暖かみが、じかに伝わってくる。

何よりも徳永直は、労働者作家としての誇りを持ち続けた。仕事のかたわらでペンを握ることがどんなに苦しいものか、彼はその苦しさも隠さなかつた。しかし、それでもなお彼は書きつづけた。彼のなかに、私はほんとうの「作家魂」を見る気がする。この情熱が、多くの人を魅きつけるのだ。

徳永直の永眠二十周年目、故郷の熊本市に文学碑が建てられる。大きな喜びである。

この設立運動に、ささやかな協力をお約束するとともに私も徳永直の生涯と文学を見つめ直し、その歩みにつづきたいと思ふ。

(日本民主主義文学同盟熊本支部幹事)

## 資料

### 外国における「太陽のない街」の反響

—江口渙著「た、かいの作家同盟記」(上)抜萃—

「『戦旗』の発行部数はぐんぐんと伸びていった。もちろん、毎号ほとんど発売禁止をくつていた。くわない号の方が少なかった。にもかかわらず雑誌はのびる一方だった。とくに一九二九年の五月号になって、「戦旗」と作家同盟との既成文壇にたいする権威は飛躍的に高まつた。それはその六月号に、小林多喜二一代の傑作『蟹工船』と徳永直のこれまた一生の代表作である『太陽のない街』が肩をならべてのつたからである。『蟹工船』は五月号六月号の二回にのり、『太陽のない街』は六月号から十一月号まで前後六回にわたつて連載された。

この二つの小説こそは、当時さかんなる上げ潮にのつて、ぐんぐんと伸びていたプロレタリア文学運動に大きな前進をうながし、みごとに既成文壇を圧倒したほどの重要な歴史的意義をもつ作品であるといえる。

まず、『太陽のない街』について書こう。この長編は当時有名だった共同印刷の大会議をとり上げたものである。この大会議は「浜松楽器」の大会議などと同じように日本労働組合全国評議会が指導したものである。むしろその裏には日本共産党がある。このような大会議が文学の中にとり上げられたことと、とくにそれがその中で自分自身もたかつかつた一労働者の手で書かれたということは、日本の長い文学の歴史の中でいまだかつてないことである。しかもそれがあのようなすばらしい文学的効果において書かれたのだ。高く高く評価されたのは当然である。『太陽のない街』が当時の日本文壇や「ナップ」の内外でどのような評価をあたえられたか。それをこ